日本映像民俗学の会第37回大会は＜ふるさとの喪失と再生＞というテーマのもと、岐阜県揖斐郡揖斐川町谷汲で開催いたします。ふるさとの喪失や急激な変容を経験する人々、それらの人々が故郷を再生、あるいは異なる場所に創造していくすがたに、よりそいながら記録することの意義や方法論に関して、考えたいと思います。もちろんこの場合の“ふるさと”は、決して特定の場所のみを指すわけではなく、言葉や伝承、慣習をはじめ、人のよりどころとなる、あらゆる文化の営みを指します。

日本映像民俗学の会
第37回岐阜大会

日時：2015年3月27日（金）、28日（土）、29日（日）
会場：岐阜県揖斐郡揖斐川町谷汲サンサンホール
主催：（社）日本映像民俗学の会
後援：揖斐川町教育委員会、中日新聞

3月28日（土）　特集上映 ＜ふるさとの喪失と再生＞

入場料 500円

10：00 ― 挨拶・趣旨説明 川瀬 慈（国立民族学博物館）
10：15 ―『水になった村』80分、2007年、監督 大西暢夫
12：00 ― 13：30　昼休み
13：30 ―『原発被災地になった故郷への旅 ―福島県南相馬市―』30分、2014年、監督 杉田このみ
14：15 ―『鳥の道を越えて』93分、2014年、監督 今井友樹
16：00 ― 17：00　総合討論：ふるさとの喪失と再生の記録
登壇予定者：各作品の監督：大西暢夫、杉田このみ、今井友樹＋川瀬慈、山口 未花子（岐阜大学）

3月29日（日）　会員作品の上映

入場無料

午前の部 10：00 ― 12：00
『水が所有されるとき―タイ・アユタヤの水辺の暮らし』 65分、2014年、木口由香
『海の聲』20分、2014年、仁田美帆

12：00―13：00　昼休み

午後の部 13：00 ― 15:00
『Sekala Niskala スカラニスカラ』57分、2012年、春日聡
『蘇る筏』20分、2015年、手塚恵子
『ジェンギのうた』10分、2015年、矢野原祐史
『ミャオ族の儀礼と女性の宗教的職能者』（仮題）20分、2015年、陶治

3月28日 特集上映〈ふるさとの喪失と再生〉

水になった村

2007年　80分　大西暢夫監督

第16回 EARTH VISION 地球環境映像祭最優秀賞

1957年、岐阜県徳山村にダム建設の話が広まった。総貯水量6億6千万立方メートル、日本最大のダムだ。当時徳山村の住民は、約1600人。みな次々に近隣の街につくられた移転地へと引っ越していった。それでも、何家族かの老人たちが、村が沈んでしまうまでできる限り暮らし続けたい、と、街から戻って来た。写真家の大西暢夫が初めて村を訪ねたのは今から15年前のこと。だれもいないと思っていた集落に家があることに驚いた。以来、ジジババたちの暮らしに魅せられ、東京から徳山村まで片道500キロ、バイクで高速道は使わず山道を走り抜けて何度も何度も通った。そしてその村でジジババたちは大西を「兄ちゃん」と呼び、共にたくさん食べ、いっぱい笑った。村には季節ごとに土地で採れるものを大切にする、暮らしの知恵や技がある。食卓にはいつも食べきれないほど大盛りのごはんが並び、山はジジババたちの笑い声に満ちている。2006年秋、いよいよ工事が終わり、水がたまり始めた。もう誰も、村に帰ることはできない。ジジババたちの変わりゆく暮らしに寄り添った15年間の記録。

配給元 HP より抜粋 http://movies.polepoletimes.jp/mizu/

原発被災地になった故郷への旅 ―福島県南相馬市―

2014年　30分　杉田このみ監督

映文連アワード2014・パーソナル・コミュニケーション部門優秀賞

小説家・志賀泉氏と共同制作したドキュメンタリー映画。本作は、2013年5月25日と26日に、小説家の志賀泉氏（神奈川県在住）と、彼の故郷である福島県南相馬市を旅した記録。南相馬市は2011年3月11日の東日本大震災と福島第一原発事故により、甚大な被害を受け、住民の多くが未だ避難生活を送っている。特に志賀氏の生まれ育った小高区は、原発から20km 圏内にあり、出入りが自由でも住むことはできない。その現在の状況も紹介しながら、志賀氏の少年時代の思い出の場所を歩く。

作品 HP http://gentabi2013.wix.com/gentabi

鳥の道を越えて

2014年　93分　今井友樹監督

平成26年度文化庁映画賞文化記録映画優秀賞

第88回キネマ旬報文化映画部門第1位

映画の舞台は監督・今井友樹の出身地、岐阜県東白川村。あるとき祖父・今井照夫から、かつて故郷の空が渡り鳥の大群で埋め尽くされたという話を聞かされる。孫である監督は“鳥の道”を探し求めて旅にでる。渡り鳥の大群が渡っていた時代、村では「カスミ網猟」が行われていた。渡り鳥を「カスミ網」でどのように捕まえたのか。なぜ渡り鳥を食べなければならなかったのか。そしてなぜ現在は禁猟になっているのか。旅の過程で生まれるひとつひとつの疑問を丹念に追っていく。

作品 HP http://www.torinomichi.com/

3月29日 会員上映

水が所有されるとき―タイ・アユタヤの水辺の暮らし

2014年　65分　木口由香監督（NPO メコンウォッチ）

チャオプラヤ河のデルタ地帯に発達したアユタヤは、タイ有数の稲作地帯。かつて、半年も続いた「洪水」は、肥沃な泥や魚をもたらす恵みだったが、50年前から始まったダムを中心とした近代的水管理、30年前からの工業団地の造成で様変わりしている。国による新しい大規模な水管理計画も始まる中、アユタヤの人びとは今、どのように「水」を見ているのか―農民、県知事、アクティビストの声を通し、人びとの過去と現在の水辺の暮らしを描く。

海の聲

2014年　20分　仁田美帆監督（映画作家）

海の恵みを糧に生きる相差の人々の姿と相差の海の風景に、長い漂白の末鳥羽にたどり着き、鳥羽の海の情景を綴った詩人伊良子清白の詩「海の聲」を重ねた映像詩。

Sekala Niskala スカラニスカラ

2012年　57分　春日聡監督（駒沢女子大学、多摩美術大学等、講師）

バリ各地の村落祭祀儀礼で行われる多様なトランス・ダンスと、コスモロジーにおける五大元素「地、水、火、風、空」をモチーフにしたサウンド・スケープで織りなす映像・音響民族誌。「Sekala Niskala（スカラ ニスカラ）」とは「可視の存在、不可視の存在」のこと。本作では各地に伝承される「サンギャン」という古い形態から「チャロナラン劇」という比較的新しい形態までトランス・ダンスのヴァリエーションを取り上げ、バリの信仰における神懸かりの意味をホリスティックな響きの中に探る。

音響マスタリング　久保田麻琴。

蘇る筏

2015年　20分　制作 京都学園大学・歴史民俗専攻学生数名＋手塚恵子（同大教授）

かつて、保津川には丹波山地で切り出された材木を、都へと運ぶ筏流しが盛んに行なわれていた。しかし、保津川の筏流しは運送手段の発達と共に衰退し、戦後、完全に途絶えてしまった。貴重な伝統技術とともに、筏の記憶も途絶えようとしている。本映像は60年ぶりに復活を遂げた現代の保津川筏流しの記録である。

ジェンギのうた

2015年　10分　矢野原佑史（京都大学アフリカ地域研究資料センター）

ピグミー系狩猟採集民は、高い音楽性とそれによる心身の療術を司る森の住人として、古くよりアフリカ大陸で知られてきた。彼らの精神世界を象徴する存在である森の精霊たちとの関わりにおいても音楽は不可欠なものであり、それぞれの精霊が個別のうたを持つ。本作品は、子どもたちが、精霊・ジェンギの衣装を縫製して聖域へ届けるまでに唄い上げられるうたとその作業過程を記録したものである。

ミャオ族の儀礼と女性の宗教的職能者（仮）

2015年　20分　陶冶（山東大学、副教授）

ミャオ族のフィールドワークで記録した映像資料を女性と宗教的な職能者の視点から編集した作品。

※作品の長さ、上映スケジュール等、若干変更する可能性がございます。